

第29回 がん検診のあり方に関する検討会	資料 2
令和元年11月13日	

女性のがん検診対策に関する ヒアリング結果

椎名構成員

女性のがん検診対策に関するヒアリング(概要)

- (開催日時) 令和元年7月25日
- (参加者) 椎名構成員、患者団体代表6名、学識経験者2名
- (開催目的) 第28回本検討会にて、がん検診の受診率向上について議論した際、女性のがん検診対策を考えるに当たっては、女性のライフステージに応じたアピールポイントやアプローチ等、丁寧な聞き取りを行った上で、検討会のとりまとめに反映すべきとの意見が挙げられた。なお、男女間では話しづらいことに配慮しつつ、女性のライフステージ等を踏まえた受診率向上に有効な方法等を議論していただく観点から、非公開形式で開催した。
- (議題) 女性に多いがんに関するがん検診の受診率向上について
(・がん検診の実施体制、環境について ・がん検診の実施日時について ・がん検診の周知方法について)
- (当日の流れ) 椎名構成員が進行役を務める形で、患者団体代表からプレゼンの後、ディスカッションを行った。

女性のがん検診対策に関するヒアリング結果

現状・課題

【がん教育、知識の普及について】

- ・検診に関する知識不足や痛み・羞恥心など、女性が増診を受けるにはバリアが多い。
- ・女性の知的レベルは上がり、自らががんや検診について勉強をしようと思う女性も多くなっている。ただ、未受診の方へのアプローチができていない。
- ・学校でのがん教育を行うことで、家族への波及効果も見られている。
- ・対策型がん検診が、精度管理をされた検診であることが周知されていない。

【女性のライフステージ毎の課題について】

- ・若年層のがん検診に対するバリアが多い。(がんは高齢者になる病気だから大丈夫、下着を脱ぐことへの抵抗感など)
- ・女性の就労率が上がる中、平日実施の集団健診は受診しづらい。
- ・個別検診を増やしたり、夜間・休日などの検診機会が増えてきている。また、子育て世代向けに一時保育や遊び場の設置等の配慮をしている自治体もある。

【検診全般について】

- ・女性医師や技師など、スタッフが女性である方が受診しやすい。(地方では人材確保が難しい状況もある。)
- ・地方では、近くに受診できる医療機関がなかったり、反対にがん検診実施者が顔見知りである等の事情で、近くの医療機関に行きづらいなどの声もある。
- ・検診結果の伝え方は、その後の受診行動にも影響する。

取組(工夫)の方向性

- ・世代に応じた教育や正しい知識の普及が必要ではないか。
- ・妊よう性を守るという視点においても、女性のバリアを理解し、柔軟な対策を講じるべきではないか。
- ・女性に多いがんについて、男性にも現状を知ってもらい、一緒に考えていくべきではないか。
- ・学校でのがん教育では、行政同士の横の連携をしっかりとすべきではないか。

- ・若年層への受診勧奨は、性交渉未経験等を含め、もう少し丁寧に行う必要があるのではないか。
- ・子宮頸がん検診に使用するクスコを複数のサイズを準備するなど、検査に付随する不快感や不安を減らし、バリアを最小限にするべきではないか。
- ・気軽に受診できる体制や検診を受けようと思った時に受診できる体制を、検診対象者と一緒に考えていくことが必要ではないか。

- ・複数の地域で連携して実施するなど、スタッフ確保や検診体制を工夫すべきではないか。
- ・がん検診の結果(異常あり、なし)を伝えるだけでなく、結果の正しい理解の仕方や、結果を受けて何をすべきかを分かりやすく伝えるべきではないか。
- ・結果通知において、自分の体の理解を深めるような工夫をすることで、ヘルスリテラシーの向上につながり、結果的にがん予防に結びつくのではないか。